JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Friday 15 November 2002 (afternoon)
Vendredi 15 novembre 2002 (après-midi)
Viernes 15 de noviembre de 2002 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の１（ａ）の文と（ｂ）の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。（コメンタリーを書きなさい。）

１（ａ）

その晩、その木曾福島の宿に泊まって、明け方目を覚まして見ると、思いがけない吹雪だった。「とんだものが降り出しました……」宿の女中が火を運んできながら、気の毒そうに言うのだった。「このごろ、どうも癖になってしまって困ります。」

だが、雪はいっこう苦にならない。で、けさもけさで、そんな雪の中を衝いて、僕たちは宿をたってきたのである。……

今、僕たちの乗った汽車の走っている、この木曾の谷の向こうには、すっかり春めいた、明るい空が広がっているか、それとも、うっとうしいような雨空か、僕は時々それが気になりでもするように、窓に額をくっつけるようにしながら、谷の上方を見上げてみたが、山々に遮られた狭い空じゅう、どこからともなく飛んできては盛んに舞い狂っている無数の雪のほかには なんにも見えない。その雪の狂舞の中を、さっきから時折出し抜けにぱあっと薄日が差してき出しているのである。それだけでは、いかにも頼りなげな日差しの具合だが、ことによるとこの雪国の外に出たら、うららかな春の空がそこに待ちかまえていそうなあんばいにも見える。

僕のすぐ隣の席にいるのは、この辺のものらしい中年の夫婦連れで、間屋の主人かなんぞらしい男が何か小声で言うと、首に白い物を巻いた病身らしい女も同じくらいの小声で相づちを打っている。別に僕たちに気兼ねをしてそんな話し方をしているような様子でもない。それはちっともこちらの気にならない。ただ、どうも気になるのは、一番向こうの席にいろんな格好をしながら寝そべっていた冬外套の男が、時々思い出したように起き上がっては、床の上でひとしきり足を踏み鳴らす癖のあることだった。それが始まると、その隣の席で向こう向きになって自分の外套で脚を包みながら本を読んでいた妻が僕のほうを振り向いては、ちょっと顔をしかめてみせた。

そんなふうで、三つ四つ小さな駅を過ぎる間、僕は相変わらず一人だけ、木曾川に沿った窓際を離れずにいたが、そのうちだんだんそんな雪もあるかないかくらいにしかちらつかなくなり出してきたのを、なんだか残り惜しそうに見やっていた。もう木曾路ともお別れだ。気まぐれな雪よ、旅人の去ったあとも、もう少し木曾の山々に降っておれ。もう少しの間でいい、旅人がおまえの雪の降っている姿をどこか平原の一角から振り返ってしみじみと見入ることができるまで。

そんな考えに自分がうつけたようになっているときだった。ひょいとしたはずみで、僕は隣の夫婦連れの低い話し声を耳にはさんだ。

「今、向こうの山に白い花が咲いていたぞ。なんの花けえ？」

「あれは辛夷の花だで。」

僕はそれを聞くと、急いで振り返って、身体を乗り出すようにしながら、そちら側の山の端にその辛夷の白い花らしいものを見つけようとした。今その夫婦たちの見た、それと同じものでなくとも、そこいらの山には他にも辛夷の花咲いた木が見られはすまいかと思ったのである。だが、それまで一人でぼんやりと自分の窓にもたれていた僕が急にそんな風にきょときょとそこいらを見回し出したので、隣の夫婦のほうでも何事かといったような顔つきで僕のほうを見始めた。僕はどうも照れくさくなって、それを潮に、ちょうど僕とは筋向かいになった座席で相変わらず熱心に本を読み続けている妻のほうへ立ってゆきながら、「せっかく旅に出てきたのに本ばかり読んでいるやつもないもんだ。たまには山の景色でも見ろよ。……」そう言いながら、向かい合いに腰かけて、そちら側の窓の外へじっと目を注ぎ出した。

「だって、私なぞは、旅先でもなければ本もゆっくり読めないんですもの。」妻はいかにも不満そうな顔をして僕のほうを見た。「ふん、そうかな」本当を言うと、僕はそんなことには何も苦情を言うつもりはなかった。ただほんのちょっとだけでもいい、そういう妻の注意を窓の外に向けさせて、自分といっしょになって、そこいらの山の端に真っ白な花を群がらせている辛夷の木を一、二本見つけて、旅のあわれを味わってみたかったのである。そこで、僕はそういう妻の返事にはいっこう取り合わずに、ただ、少し声を低くして言った。

「向こうの山に辛夷の花が咲いているとさ。ちょっと見たいものだね。」

「あら、あれをごらんにならなかったの。」妻はいかにもうれしくってしようがないように僕の顔を見つめた。「あんなにいくつも咲いていたのに。……」

「嘘をいえ。」今度は僕がいかにも不平そうな顔をした。

「わたしなんぞは、いくら本を読んでいたって、いま、どんな景色で、どんな花が咲いているかぐらいはちゃんと知っていてよ。……」

「何、まぐれ当たりに見えたのさ。僕はずっと木曾川の方ばかり見ていたんだもの。川のほうには……」「ほら、あそこに一本。」妻が急に僕を遮って山のほうを指した。

「どこに？」僕はしかしそこには、そう言われてみて、やっと何か白っぽいものを、ちらりと認めたような気がしただけだった。

「いまのが辛夷の花かなあ？」僕はうつけたように答えた。「しようのない方ねえ。」妻はなんだかすっかり得意そうだった。「いいわ。まだ、すぐ見つけてあげるわ。」

が、もうその花咲いた木々はなかなか見当たらないらしかった。僕たちがそうやって窓を顔に一緒にくっつけて眺めていると、目ばかりの、まだ枯れ枯れとした、春浅い山を背景にして、まだ、どこからともなく雪のとばっちりのようなものがちらちらと舞っているのが見えていた。

僕はもう観念して、しばらくじっと目を合わせていた。とうとうこの目で見られなかった、雪国の春に真っ先に咲くというその辛夷の花が、今、どこその山の端にくっきり立っている姿を、ただ、心の内に浮かべてみていた。その真っ白い花からは、今し方の雪が解けながら、その花のしずくのようにぽたぽたと落ちているにちがいなかった。……　（堀辰雄「辛夷の花」）

（注）堀辰雄（一九〇四年～五三年）小説家。本文は『堀辰雄全集　第三巻』によった。

1（b）　フィールド・ノート

小学校の夏休みに父とふたりで旅行をした
あるかなきかの遠い昔だ
吉林省巴虎屯という小さな村ーー　パフートゥンという小さな村ーー
父はわたしのお河童頭を母に刈らせた
坊っちゃん刈りの寂しい少年が生まれ出るまで
そうして
まだ売買婚が行われているという辺鄙なその地方へ　民俗採取にいったのだ
男のふたり旅である
ギギーッと独木舟を漕ぎ出して　松花江を渡っていった
そこは楊柳のうつくしい村
水の匂いでできている
江岸には村人たちが大勢　異人親子を眺めていた
たくさんの問答のあと　父はフィールド・ノートにこんなふうに書き込んだ
（果たして然らばこの無造作に見える独木舟こそ満州族固有の国民遺産の一つだということ
とができる。現行のそれは樺をもって作り二人の木匠がかかりきりで八箇月を要する。一
隻の建造日は約二百円約四年間の使用に耐え得る。日々の収入は舟一隻に付き約三十円。）

江岸にしゃがんで放尿した小さな背なかに
村の古老はわたしの正体を見破って父に懇願した
息子の嫁にぜひこの子を買いたい　金鍍　絹　ロバ　何でも望んでくれ
価がよければ売ってもよいがーー父は落ち着き払っていう
村人たちにタバコを配り　古老とふたり陽のきらめく水辺におりていった
伝統に則って柳のほそい葉を数え談合をはじめた
（冬には緑豆などを用ふ。商談には即ち分割できぬものを用ふ。）

柳の葉を肩先や背にくっつけて父はひとりで戻ってくる
おまえに千円の値がつけられたぞ　千円なら女になるか
どうだと　笑いながらいう
これも父の民俗採取の一環だったのか　どうか
あるかなきかの遠い昔だ
千円の女の子を村人たちにかどわかされないうちにと
父は私を急がせる　急がなければならない
白い漆喰の屋根の角を振り返りながらどんどん歩いていく

父からはしんめりと血の匂いが漂う
おまえは男の子だと　父はわたしにいった
おまえは男の子だぞ
わたしは父のくわえたタバコに火を点ける
江岸では独木舟がゆれていた
わたしが少年のわざとらしい利発さで舟にとび乗ると
夕影の忍び寄る岸辺の波が
Byon Byon Byon――と嘲笑う　（財部鳥子『中庭幻灯片』、一九九二年）

財部鳥子（一九三三年～　）詩人。この詩では、十二歳までを過ごした満州でのある日を描いている。敗戦直後の混乱期には、旧満州にいた日本の婦人たちは身を守るために男装をした。